



ステファニー・奈々さん(29)

＝会社員、アクセサリーなどのデザイン

—お生まれはどちらですか？

札幌です。勤めている会社も札幌で、事務の仕事をしています。

—アクセサリー作りなどもなされたか。

はい。細めのワイヤを使ってイヤリングやネックレスを作ったり、女性向けの小物とか紙ぶくろに使えるようなアイヌ民族の文様パターンを作ったり、いろいろ試しているところですが。

—とてもきれいですね。お父さんはアメリカの方ですが、アイヌについて知ったのはいつですか。

小学生の時、教科書にアイヌの写真のっていたんです。とても古い写真で、あまり写りも良くなくて、その時は良いイメージを持ってませんでした。母にその話をしたら、「あなたも血を引いているのよ」と言われてびっくりしました。

—その時の気持ちは？

意外すぎて笑っちゃうほどでした。4年生から母が千歳市のアイヌ文化伝承者・中

本ムツ子さんのアイヌ語教室に通い始めて、私もついていこうになりました。アイヌ語は得意ではなかったけれど、10年ほど通いました。中本さんの人柄にすごくひかれたんです。貴重な経験でした。当時から絵をかわたり物を作ったりするのが好きで、アイヌの文様にも興味がありました。でも、「自分が作っていいのかな」という気持ちもありました。

—どうしてでしょう。

もっと子供のころから勉強してアイヌについて何でも知っていて、アイヌ語も話せるような人がやることだと思っていたんです。でも、物を作るのは自分のためでもあるんですね。自分が好きな物が増えたらうれしいし、和人に着物が似合うように、きつと私にもアイヌの物は似合う。自分が好きな物をいろいろな人に広めたいと思って。ゆくゆくは自分の作った物をかざって、人に見てもらおうスペースを千歳市内に作るのが夢です。

タンクエヘラムアイ。

「きみ、これ知ってる？」の意味

■チャランケ(討論)

チャランケとは、裁判のようなものです。何か物をとられた、約束を破られた、失礼なことをされた、などのトラブルがあり、がまんができないうる時はチャランケを申しこみます。そして、当人同士で徹底的に話し合います。相手の言うことに反論できなくなったり、おこつて手を出したり、話のつじつまが合わなくなれば負けとなり、負けた人は言葉や品物、

仕事を手伝うなどの方法でおわびをします。負ければ大変なことになるので、周りの人が見守り、時には仲裁します。トラブルを平和に解決するための手段ですが、スランケ、イツカチャランケ、らほウチャランケ、などという、人に言いがかりをつけることをして物々しい人、自分や人を助けるためでもあり、

狩りに行って山で会った人に話を聞く若者。あるとき悪い村長のうわさを知った



チセコロカムイの怒り

＝千歳市の話

(「白沢ナベ口述 ウエベケレ チセコロカムイの怒り」より)

私はウライウシナイに住む男です。1人暮らしなので、男の仕事も女の仕事も何でも覚えて、自分でおいしい料理を作って暮らしていました。狩りをしても魚をとっても、いつも獲物に恵まれます。1人なので食べきれない分は家の中で干してとっておき、ほかに何を食べていともほしいとも思わない、満ち足りた暮らしをしていました。狩りに行き、よく山の中であちこちの村の人たちと出会って話すことがありました。あるとき、ほかの村の長者と狩り小屋にとまて話していると、こんなことを聞きました。

「私の住むクスル(銅路)には川の河口、中流、上流に三つの村があります。河口の村の村長は困った男で、村人が狩りをしてくるとおれの狩り場とったものだらう」と言つてチャランケ(討論)をしかけ、肉や財産を半分取つてしまいます。そうして1人裕福になっていますが、私たちは困っているんです。

これ聞いて、そのようなよくばりの村長は許せなさいと思いました。暴力はいやですが、言葉では負けません。ある日その村に出かけました。ここがクスル川だろうと思つたところに出て、下つて行くと見たこともない大きな村に着きました。村の真ん中に、島ほどもある大きな家がありました。

おはなし
語りながら
おはなし
語りながら

そこはいつか山で会った長者の家でした。妻やむすめ、息子もいて、とても豊かな様子です。何年かぶりにおいさつをして、夜まで話しこみました。ある日、河口の村まで案内してもらいました。村長の家に通されると、聞いていたとおり家いっばいに宝物が積み重なって光っています。

主人はまともにあいさつもしませんが、私はいまさらキョロキョロせず、話し始めました。口が達者な村長で、私が何か言おうとする、その先にも言うので思つたように話せません。じつと待つて、間があいたところで、「あなたも村長が狩りをすると獲物を取り上げ、つぐないとして宝物まで取り上げておいて一体どういふつもりかと切り返しました。しかし、村長は悪びれもせずとほけるばかり。そこで「では、あなたがいのる神々にチャランケする」といつて、いろいろの神に抗議しました。次に上座に祭られているチセコロカムイ(家の守護神)の前で「家の住人の悪事を見のがして、それでも偉大な神といえるのか。神とも呼ばないものは、切りきんでバラバラにして捨てましょ」といりました。するとチセコロカムイが宝物を飛びこえて、いろいろのそばではね回り、主人の頭に飛びかかってはげしくはねました。

村長が悪事を認めたので、村人たちから取り上げた宝物を返させた



悪い村長の家の守り神にのけると、神が動きだして村長をこらしめた



カムイがばつをあたえる

このお話は千歳市で語られてきたものです。主人公が暮らすウライウシナイという地名は空知管内浦臼町にもありますが、アイヌ語には同じ地名があちこちにあるので、どこをさしているかははっきりしません。

主人公はクスルまで行って悪い村長をこらしめようとするが、悪事を認めないの、その家の神々にいのつてばつをあたえてもらいました。

チセコロカムイとは大きなイナウのこと。カムイとして家の中を見守ります。しかし家の者が悪い事をするれば、それを教えるのもカムイの仕事です。そこでイナウが動きだして村長をこらしめたのでした。

なお、チセコロカムイは地域によつて形がちがいます。千歳の人々は、地元イナウを思い浮かべながらこの話を聞いたことでしょうから、ここでは千歳市のチセコロカムイをさがしました。